

フラナリー・オコナー「聖霊のやどる 神殿」における“emptiness”

久保尚美

敬虔なカトリック教徒であった作家フラナリー・オコナー（Flannery O'Connor, 1925-1964）は、ニヒリズムや実存主義の思想の広がる時代にあって“nothing in this world lends itself to quick vaporization so much as the religious concern”と認識しながらも、“I see from the standpoint of Christian orthodoxy”という姿勢を貫き、そのような社会における信仰と人びととの結びつきを作品に描き出した¹⁾。だが生涯の大半をプロテスタント正統主義の根強いアメリカ南部に暮らし、その地に多く題材を求めたこともあり、“[a] novelist who is a Catholic”（MM 177）であるオコナーの作品において、カトリック教徒が主な登場人物となる作品はわずかである²⁾。そのうちでも本論文では、オコナーの作品のなかでセッティング、登場人物、シンボリズムにおいてもっともカトリックの要素が強い³⁾と評される短編

1) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners: Occasional Prose*, ed. Sally and Robert Fitzgerald (New York: Farrar, 2000), 155, 32. 以下 MM と略記する。

2) オコナーの作品でカトリック教徒の登場する作品は、本論文で扱う「聖霊のやどる神殿」を除けば、「強制追放者」（“The Displaced Person,” 1954）に登場するフリン神父（Father Flynn）、「長引く悪寒」（“The Enduing Chill,” 1958）に登場するフィン神父（Father Finn）のみであるとされている。Patrick Samway, “Toward Discerning How Flannery O'Connor's Fiction Can Be Considered ‘Roman Catholic,’” *Flannery O'Connor's Radical Reality* (Columbia, SC: U of South Carolina P, 2006), 168-69.

3) Anthony Di Renzo, *American Gargoyles: Flannery O'Connor and the Medieval Grotesque*, (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1993), 81.

「聖霊のやどる神殿」(“A Temple of the Holy Ghost,” 1954) を取り上げ、主人公の 12 歳の少女の宗教的な意識が研ぎ澄まされていく様子をたどってみたい⁴⁾。

まず簡単に作品を紹介する。「聖霊のやどる神殿」は次のような筋書きをもつ作品である。作品内で名前を示されないまま “the child” と呼ばれる 12 歳の少女の家へ、修道院のミッションスクールに通うまたいとこで 14 歳のふたりの娘たち、ジョアンヌ (Joanne) とスーザン (Susan) が、週末を過ごすために訪れる。異性のことで頭がいっぱいのふたりをエスコートさせるべく、主人公の母親は牧師を目指す 16 歳の青年ふたり、ウェンデル (Wendell) とコリー (Cory) に引き合わせる。夕食に招待された青年たちが、娘たちの興味をひこうと恋歌めかした賛美歌を歌うと、娘たちはラテン語で賛美歌を歌いかえす。夕食後、4 人は連れ立って祭りに出かける。4 人の様子を遠巻きに見ていた少女は、そのやりとりをくだらないと馬鹿にし、夕食をともにすることもせず、祭りにも同行せず、自室でひとり手短かに祈りの言葉を口にして就寝する。深夜になり、祭りから戻ってきた娘たちから見せ物小屋の両性具有者の話を聞いて驚いた少女は、その様子を想像しながら眠りにつく。翌日、母親とともにまたいとこたちを修道院に送っていくと、シスターから聖体降福式に出席するように促される。少女は礼拝堂で神の存在を感じながら祈りを捧げ、再び両性具有者の言葉を思い浮かべる。物語は家に戻る車のなかの少女の様子で閉じられる。

思春期にさしかかる 12 歳の主人公は、成長していく自らのアイデンティティに不確かさを抱えている。そのあらわれとして作品の冒頭で強調さ

4) またこの作品は、オコナーの作品中もっとも伝記的であるともされる。J. Ramsey Michaels, *Passing by the Dragon: The Biblical Tales of Flannery O'Connor* (Eugene: Cascade, 2013), 102 など。

れるのは、2歳年上の娘たちに対して少女が示す違和感である。それはまず、性的な関心における少女と14歳のまたいとこたちとの意識の差異によって明らかにされる。作品のはじめの段落では、ふたりのまたいとこたちが、いわゆるティーンエイジの娘らしい振る舞いを繰り返す様子が描かれる。少女の家に着くなり、ふたりは制服から派手な私服に着替えると口紅をつけ、ハイヒールで歩き回り、姿見の前で歩みをゆるめては自分の脚を眺める。そのようなまたいとこたちの振る舞いに対する少女の反応は以下のようなものである。“None of their ways were lost on the child. If only one of them had come, that one would have played with her, but since there were two of them, she was out of it and watched them suspiciously from a distance.”⁵⁾ここからは少女が、女性らしさを意識して着飾ることには興味を持っていないながらも、ふたりの様子を仔細に眺めている様子がわかる。少女には、年上の娘たちならば、自分のロールモデルになるかもしれないという期待があったのかもしれない。しかし数時間観察を続けた少女は、ふたりとも“practically morons”だと断じ、“she was glad to think that they were only second cousins and she couldn't have inherited any of their stupidity” (CS 236) と思うほどに、ふたりの言動に否定的な感情を抱いている。では少女の強い嫌悪感はふたりのどこに向けられたものなのか。“Neither one of them could say an intelligent thing and all their sentences began, ‘You know this boy I know well one time he . . .’” (CS 236) とあるように、少女は、ふたりが口を開けば異性の話しかしなすこととともに、「知的なことはなにひとつ言えない」ことにいらだっている。つまり少女のまたいとこたちに対する軽蔑や不満は、Cynthia L. Seel が指摘するように彼女が“the mystery of puberty”をまだ経験していないがゆえの“uneasy”⁶⁾だと考えられるとともに、年上の娘たちに

5) Flannery O'Connor, *The Complete Stories of Flannery O'Connor* (New York: Farrar, 1971), 236. 以下 CS と略記する。

期待する知性の欠如に対する失望からくるものなのである。

少女が賢さを重んじていることは、またいとこたちをエスコートさせるべく招いた16歳のふたりの青年たちに対する彼女の態度からも明らかである。説教師を目指しているという青年たちが訪れて、娘たちに向けて“a hillbilly song that sounded half like a love song and half like a hymn” (CS 240) を歌い上げ、それに対して娘たちが賛美歌“Tantum Ergo”をラテン語で歌いかえすというやりとりを眺めていた少女は、“Tantum Ergo”を知らない青年たちの知識のなさ、それに対してただ笑い転げている娘たちの薄っぺらさに憤慨する。そして4人からは離れて台所で食事をとるが、少女の態度の悪さをたしなめる料理人に向かって“Those stupid idiots” (CS 242) と答えている。また後の場面においてまたいとこたちに対して“Im about a million times smarter” (CS 245) ということからも明らかのように、少女にとっては年上の娘たちも青年たちも知的とは思えず、4人が繰り広げる異性を意識した振る舞いにも共感できず、今後のロールモデルとなるような存在にはならない。自分を賢いと思っている少女の態度は、辛辣な皮肉を言っただけで母に叱られ、料理人からも“How come you be so ugly sometimes?” (CS 242) とたしなめられるようなものである。

だが、そのような横柄な態度は Anthony Di Renzo が指摘するように、少女の疎外感や焦燥感を覆いかくす“defensiveness”⁷⁾のひとつであり、虚勢として受けとることもできる。4人が祭りに出かけると少女は自室に戻るが、人前で見せる態度とは対照的に、ひとりきりになったときの姿からは彼女の抱える閉塞感がうかがえる。“She went upstairs and paced the long bedroom with her hands locked together behind her back and her head thrust forward

6) Cynthia L. Seel, *Ritual Performance in the Fiction of Flannery O'Connor* (New York: Camden, 2001), 201.

7) Di Renzo, 82.

and an expression, fierce and dreamy both, on her face” (CS 242) とあるように、少女は部屋のなかをなかば思い詰めた様子で歩き回る。そして外から聞こえる祭り会場の音に、頭のなかでその様子を思い浮かべるが、想像のなかの観覧車とメリーゴーラウンドは、“the ferris wheel going around and around up in the air and down again and the screeking merry-go-round going around and around on the ground” とあるように、ひたすら「回り続ける」ばかりである。そのあと少女は、一年前の祭りのときに大人向けのテントに入れず、その看板を食い入るように眺めていた自分の姿を思い出すのである (CS 242-43)。そこからは、大人の領域への参入を果たせず締め出されて行き場を見いだせないという閉塞感を少女が抱えていることが読み取れる。

では少女はどのような大人になりたいと思っているのか。大人向けのテントについての描写に、“they contained things that would be known only to grown people” (CS 242) とあるように、少女にとって「知ること」が「大人」になることにおいて重要な要素である。そしてテントのなかで医療に関係することが行われていると推測した少女は、大人になったら医者になりたいと考え、その後はエンジニアになりたいとも考える (CS 243)。また別の箇所では少女がする想像のなかでは、「兵士」として「世界大戦」で活躍した後、ともに戦った仲間からの求婚を拒否する自分を思い描いてもいる (CS 105)。このような職業観を抱く少女について、“something vaguely indeterminate about her gender” が見られると読み込むことは可能だろう⁸⁾。しかし少女は、自分の将来について考えを進めていくうちに “have to be much more than just a doctor or an engineer” と感じ、“a saint” になることを思いつく (CS 243)。その理由は少女にとって「聖人」は “the occupation that included everything you could know” (CS 243) だからである。この少女の望みが示すのは、彼女が「知ること」を重視していることと同時に、医

8) Michaels, 105.

師やエンジニアといった「職業」と、キリスト教における「聖人」が少女のなかで地続きになって「職業」として捉えられているということだ。つまり「聖人」がなりたいた「職業」の最上位に位置づけられるほど、少女にとって信仰は身近で自然なものなのである。

Howard R. Burkle は少女について、オコナーの描く子どもたちのなかで “in her heart she is the most traditionally religious” と指摘する⁹⁾。ともすれば “as mere naughtiness” だとされる少女の態度の端々に、“a protest against those who pretend to be religious but are not” のあらわれが見受けられるのだ¹⁰⁾。そしてその「反感」が、鋭い観察眼を持つ少女に、牧師になろうとしている青年たちが賛美歌を知らないことを憤らせ、彼女には大仰でわざとらしく思えるのであろうパプティストの説教師の口調の物まねをさせ、ミッションスクールの修道女から受けそうになる抱擁にも白々しさを感じ、“They had a tendency to kiss even homely children” と “a frigid frown” で回避させるのだ (CS 241, 243, 247)。つまり少女の辛辣さは、思春期を迎えようとする時期における潔癖さと、信仰心の強さとが結びついたものなのである。そしてその観察眼は彼女自身にも向けられる。少女は「聖人」こそ望ましい職業だと考えつくが、“yet she knew she would never be a saint” (CS 243) と、すぐさまその可能性を否定する。なぜなら少女は “She did not steal or murder but she was a born liar and slothful and she sassed her mother and was deliberately ugly to almost everybody” と普段の態度の悪さを認め、さらには “She was eaten up also with the sin of Pride, the worst one” と傲慢という大罪をおかしていることを認めているからだ (CS 243)。

だがそれでも少女はあきらめず “she could be a martyr if they killed her

9) Howard R. Burkle, “The Child in Flannery O’Connor,” *Flannery O’Connor Bulletin* 18 (1989): 61.

10) Burkle, 61, 62.

quick” と思いつく (CS 243)。そして「殉教者」になるべくさまざまな責め苦を考え、ライオンに引き裂かれるというかたちで「殉教」するのはどうかと思ひ浮かべ始めるのだが、その想像にはやはり少女の閉塞感が示されている。

The first lion charged forward and fell at her feet, converted. . . .The lions liked her so much she even slept with them and finally the Romans were obliged to burn her but to their astonishment she would not burn down and finding she was so hard to kill, they finally cut off her head very quickly with a sword and she went immediately to heaven. She rehearsed this several times, returning each time at the entrance of Paradise to the lions. (CS 243)

この想像のなかの少女は、ライオンたちを改宗させ、火炙りに耐え、最後には殉教者たるべく殺されるのだが、ここでまず少女の「頭」と「体」を切り離されることが彼女が死に天国に向かうための条件となっていることに着目したい。少女にとって「頭」は、自慢であると同時に傲慢の罪の源である知性を生み出すものであり、また後ほど述べるように性差を生み出す源でもある。それが切り離されるという想像には、心と体がひとつになったままではいけないという少女の葛藤があらわされているだろう。さらに、少女の「殉教」をめぐる想像は、「天国の入口までいくとライオンのところに戻る」という堂々巡りを繰り返す。切断された自己を繰り返し想像してしまう少女は、自分の将来像を欠けるところのない“whole”なものとして描けない閉塞感を抱えているのだと考えられる。

そのような心もとなさは、少女の祈りの場面に“emptiness”としてあらわれる。その重要性を指摘するにあたり少女の祈りの場面に立ち入る前に、オコナーの作品における“emptiness”の感覚について触れておきたい。オコナーの長編小説において主人公は、たびたび“emptiness”に苛ま

れる。それは不在の認識ともいべき感覚で、そのあらわれ方はたとえば、目に映る虚ろな光景、不意に直面する虚しさ、抱え続ける飢餓感など、登場人物たちのさまざまな感覚と結びつき様ではない。そしてまたそれに対峙する姿勢もそれぞれに異なる。たとえば長編『賢い血』(Wise Blood, 1952)では、冒頭の場面から主人公の青年ヘイゼル・モーツ(Hazel Motes)の視界には空虚な光景ばかりがうつる。列車の車窓から目にするのは“the empty darkening fields”¹¹⁾や“the dark empty space outside”(WB 16)であり、故郷の家では“the empty rooms”(WB 26)ばかりになっており、その後中古車売場で目をつけた車のクラクションさえ“empty horn”(WB 75)を鳴らす。そして“He had the feeling that everything he saw was a broken-off piece of some giant blank thing that he had forgotten had happened to him”(WB 74)と感ずるように、不在の感覚は絶えず彼につきまとう。

『賢い血』において“emptiness”とヘイゼルの結びつきをもっとも強く示すのが、彼が説き始める教会である。彼が説くのは“the Church without Christ”つまり空っぽの教会なのだ。その背景にあるのは、母親によってぬぐい去ることのできない罪の意識を植え付けられた幼少期の経験である。10歳の頃にヘイゼルは、カーニバルで大人向けの罪深い“SINsational”な見せ物をおこなうテントに入り込み、棺桶に似た箱のなかで裸体をくねらせる女性の姿をのぞき見る(WB 60)。するとそのあと息子の「罪」を察した母親に咎められるのだが、そのときに母親から“What you seen? . . . Jesus died to redeem you”(WB 63)と責められる。幼いヘイゼルは母親の叱責の意味を十分に理解できない一方で、いわれなき罪悪感を感じ、すでに贖われてしまっている代償として自らに苦痛を与え、贖いを無効にしようとする。翌日ヘイゼルは小石をいくつも靴のなかに入

11) Flannery O'Connor, *Wise Blood* (New York: Noonday, 1998), 12. 以下 WB と略記する。

れて森を歩く。そうすることは “to satisfy Him” と考えたのである (WB 63-64)。しかし “Nothing happened. If a stone had fallen he would have taken it as a sign” とあるように、神からの応答はない (WB 64)。彼にとってはなんらかのサインが「ある」ことこそ、彼自身の償いが有効である証であり、イエスによる贖いの有無を証すことになるはずであった。ヘイゼルの期待はつまり、目に見える形での応答であったのだ。しかし彼の待ち受けた形での応答はない。この「なにも起きない」ということが、ヘイゼルの抱える “emptiness” の根源にあるのだ。この応答の不在が彼に突きつけたのは、確かめるすべのないままに、イエスによる贖いを信じ、その代償を信仰というかたちで支払い続けるかどうか、「ヨハネによる福音書」の “they that have not seen, and yet have believed” (John 20:29)¹²⁾ になれるかどうかという問題だ。しかしその問題を抱えたまま青年となった彼は、応答のないままその存在を認めて自らの有責性を引き受ける代わりに、魂などないと嘯き “nothing” (WB 24) に改宗したのだと自らに言い聞かせながら、自らを贖ったとされるイエスの不在こそを信じることにするのである。そして自らが贖われてはいないことを示すため、そのようなイエスのいない、つまり空っぽの教会をうち立てるのだ。

『賢い血』においてヘイゼルが繰り返し目にする “emptiness” は、彼が幼少期に経験した神からの応答の不在という「巨大な空白」の断片だといえるだろう。そして作品の随所でヘイゼルの目が “emptiness” を見いだすことはまた、彼の目がそれでもやはり応答を探してしまうことのあらわれだ。したがってイエスの不在を説くという彼の試みが作品の終盤で頓挫するとき、ヘイゼルが自ら目を潰し盲目になることは、「見ずに信じる」ことへの彼の決意の表明である。

神からの応答への渴望とその不在は、長編『激しく攻むるものはこれを

12) 以下、聖書からの引用は *The Holy Bible: Douay Version* による。

奪う』(*The Violent Bear It Away*, 1960)においても中心的なテーマである。ヘイゼル・モーツが視覚的な「しるし」の不在を確かめるように虚空を見つめたとすれば、『激しく攻むるものはこれを奪う』の主人公フランシス・マリオン・ターウォーター (Francis Marion Tarwater) 少年が待ち望みながらも得られず苦しむのが、預言者に神から与えられると彼が信じる“call”である。幼くして親元からさらわれ、自らを預言者という大叔父メイソン・ターウォーター (Mason Tarwater) によってその後継者となるべく教育を受けて育てられたターウォーター少年は、預言者という仕事に対して憧れと嫌悪という両面感情を抱いた。旧約聖書に記されているような大預言者に強く憧れる一方で、もし自分が預言者になるのなら、大叔父が彼に“the first mission the Lord sends you”だと説く“baptize a dim-witted child”¹³⁾ (VB 9) というようなことは自分がすべき仕事ではないと考えていた。また大叔父が熱心に語る預言者がその死後に与えられるという報酬が、イエスそのものであるという“the bread of life”のみであるということにも納得ができなかった。少年にとって「お召し」は神からじかに受け取るものであり、自分と神とのあいだに「生命のパン」であるイエスが介在することも耐えがたいことであったのだ。

ターウォーター少年は神からの直接のお召しを、“a clear and empty sky” (VB 22) からの声として待ち受けている。“When the Lord’s call came, he wished it to be a voice from out of a clear and empty sky, the trumpet of the Lord God Almighty, untouched by any fleshly hand or breath” (VB 22)。しかし大叔父の死後も「虚空」からじかに与えられるはずの「お召し」は聞こえない。それ以降、彼につきまとい苦しめるのが“a strange waiting silence”であり、それは次第に“a peculiar hunger” (VB 161) というかたちでも彼を苛むよ

13) Flannery O’Connor, *Violent Bear It Away* (New York: Noonday, 1998), 9. 以下 VB と略記する。

うになる。また大叔父の死後ずっと、ターウォーター少年は“the strangeness in his stomach, a peculiar hunger” (VB 161) を感じるようになる。そして「静けさ」と「空腹」は、“like an insistent silent force inside him, a silence inside akin to the silence outside, as if the grand trap left him barely an inch to move in, barely an inch in which to keep himself inviolate” (VB 162) とあるように、体の外側と内側の両方から彼を責め苛む。そして作品の終盤には、自らの空腹を満たすものは「生命のパン」しかないことを認め、大叔父が示した預言者への道を進むことになるのである。

このように、オコナーの作品において、神からの応答の不在は“emptiness”として主人公たちにつきまとい、キリストに対する信仰をめぐる葛藤へと彼らを駆り立てる。しかし換言すれば、彼らが抱えている“emptiness”は、神からの応答を待つための空白ともいえる。では「聖霊のやどる神殿」における少女の祈りの場面を、“empty”という表現に着目しながらみてみよう。「殉教者」になる想像を繰り返した少女はいったんベッドに入るが、祈っていなかったことを思い出し、ベッドの脇に跪いて「使徒信条」を早口でとなえ始める。

She took a running start and went through to the other side of the Apostle's Creed and then hung by her chin on the side of the bed, empty-minded. Her prayers, when she remembered to say them, were usually perfunctory but sometimes when she had done something wrong or heard music or lost something, or sometimes for no reason at all, she would be moved to fervor and would think of Christ on the long journey to Calvary, crushed three times on the rough cross. Her mind would stay on this a while and then get empty and when something roused her, she would find that she was thinking of a different thing entirely, of some dog or some girl or something she was going to do some day. (CS 244) (下線は筆者による)

この場面に描かれるように、祈りに対する少女の態度は気まぐれで、おざなりで、気持ちもこもってたりいなかったりといわゆる模範的なものではなく、むしろ少女が反感を示すような「うわべだけの信仰」のようにみえる。そのため“empty-minded”や“Her mind... get empty”といった表現も少女の飽きっぽさを示しているようにみえるかもしれない。しかしオコナー作品において“emptiness”の感覚が神からの応答の不在を意味し、それゆえ神からの応答を待つための空白を示すのだとすれば、少女が祈りの途中に「空っぽな気持ち」になるとき、またイエスの苦難を心のなかでたどるうちに「頭が空っぽになる」とき、そこに生じている“emptiness”も同様のものだと考えてもよいだろう。それはヘイゼルやターウォーター少年を追い詰め苛むような苛烈なものではないかもしれない。だが少女はこの祈りの場面で確かに、“emptiness”を抱えている。そして「空っぽ」になるのが「頭」であることは、少女にとって重要だ。「賢さ」を自慢に思う一方で「高慢」の罪を認識し「頭」と「体」を切り離されなければ「天国」の入口にたどり着けないと思う少女にとって、「頭」が「空っぽ」になることは、少女の自意識が空となり、応答を受け入れる準備ができていた瞬間であり、と同時に満たされなければ虚しい渴望の瞬間であると考えられる。

自らのアイデンティティに不安を抱える少女は、この作品において自らが“a temple of the Holy Ghost”であるという認識を与えられることになる。作品の冒頭において、またいとこたちはお互いを“Temple One”、“Temple Two”と呼び合うが、それはふたりがシスターから、車の後部座席で男の人に誘惑されそうになったら、“Stop sir! I am a Temple of the Holy Ghost!”と言いなさいと、教えられたことを冗談にしているのであった（CS 236）。これは性的な不品行を戒めるくだりのある「コリント人への第一の手紙」における“Or know you not, that your members are the temple of the

Holy Ghost, who is in you, whom you have from God ; and you are not your own?” (Corinthians 6:19) に言及したもので、信徒の身体は「聖霊のやどる神殿」であり、キリストのものであるのだから、それを穢すことはキリストの肢体に対する罪であるため、他のいかなる罪よりも恐ろしいとする教えにもとづくものなのだが、娘たちはシスターの説教を茶化してお互いをそう呼び合っては大笑いしているのであった (CS 238)。だが少女にはふたりの笑う意味が理解できない¹⁴⁾。むしろ少女の母親がまたいとこたちに、“After all, that’s what you are—Temples of the Holy Ghost” とたしなめると、“it’s all over her head anyhow” とあるように、少女の「頭」がその言葉でいっぱいになる。そして “a present” を受け取ったかのように思うのである (CS238)。“I am a Temple of the Holy Ghost, she said to herself, and was pleased with the phrase. It made her feel as if somebody had given her a present” (CS 238). 少女にとってなぜこの言葉が「贈りもの」なのか。これとは対照的な場面が短編「火の中の輪」(“A Circle in the Fire,” 1954)にある。南部社会の価値観に従い、娘を淑女に育て上げようとする母親に反発を感じている 12 歳の少女サリー・ヴァージニア (Sally Virginia) は、粗暴な少年たちに “Jesus, . . . another woman” (CS 185) と言われると次のように反応する。“She dropped back from the window and stood with her back against the wall, as if she had been slapped in the face and couldn’t see who had done it” (CS 185)。サリー・ヴァージニアにとって、少年たちによってなされる「女」という名付けは、自分のあずかり知らないところから自らを一方的に規定する、暴力的なものである。それに対して「聖霊のやどる神殿」では、ふたりの娘た

14) 友人 Betty Hester への 1956 年の手紙において、オコナーは次のようにティーンエイジに関する嫌悪感を述べている。“When I was twelve I made up my mind absolutely that I would not get any older. I don’t remember how I meant to stop it. There was something about ‘teen’ attached to anything that was repulsive to me. I certainly didn’t approve of what I saw of people of that age.” Flannery O’Connor, *Collected Works*, ed. Sally Fitzgerald (New York: Library of America, 1988), 985.

ちが受け入れていくであろう「女性」という性差にもとづくアイデンティティに違和感を覚えている少女にとって、「聖霊のやどる神殿」という名付けは、少女に性差によって規定されるのではないアイデンティティの可能性を与える。とりわけ信仰における自己形成を願いながらも確信の持てない少女にとって、自らが「聖霊のやどる神殿」つまり聖霊を受け入れるための器であるという認識が与えられることは「贈りもの」に他ならない。

この短編で少女にとって「聖霊のやどる神殿」という認識とともに重要な役割を果たしているのが、両性具有者の存在である¹⁵⁾。祭りから帰った娘たちから見せ物小屋で“a man and woman both”である“a freak”を見たとき聞いた少女は、その存在を“the answer to a riddle that was more puzzling than the riddle itself”と感じ、“You mean it had two heads?”と娘たちに問う(CS 245)。この発言は少女が性に関して無知であること、さらに性差を生み出すのは「頭」だと認識していることを示している¹⁶⁾。少女にとっては性差を決めるのもやはり「頭」なのであり、「殉教」の空想において「頭」が切り離されるのはそのためでもあったのだ。娘たちは少女の考えを否定して、両性具有者が下半身を見せたのだと説明する。しかし少女は、その秘密をふたりに尋ねたいと思いつつもそうせず、そのまま自分のベッ

15) Louise Westling は「聖霊のやどる神殿」と Cason McCullers の *The Member of the Wedding* (1946) を比較し、オコナーがマッカーズの作品の要素を“absorbed them unconsciously”しているのではないかと推測し、もっとも明確なのが“the symbol of the hermaphrodite”と述べている。“The Perils of Adolescence in Flannery O'Connor and Carson McCullers,” *Flannery O'Connor Bulletin* 8 (1979): 90. 両者の相違については、また稿を改めて論じたい。

16) このような少女の認識について、性差の構築性という論点から言及している論考として、Natalie Wilson, “Misfit Bodies and Errant Gender: The Corporeal Feminism of Flannery O'Connor,” *On the Subject of the Feminist Business?: Re-reading Flannery O'Connor*, ed. Teresa Caruso (New York: Peter Lang, 2004), 94-119; Louise Westling, *Sacred Groves and Ravaged Gardens: The Fiction of Eudora Welty, Carson McCullers, and Flannery O'Connor* (Athens: U of Georgia P, 1985), 143 など。

ドに戻り、見せ物小屋のテントの様子を思い描こうとするが、強い眠気を感じた少女が想像するのは、両性具有者の姿ではなく、そこに居合わせる観客の神妙な顔つきなのである。“She was better able to see the faces of the country people watching, the men more solemn than they were in church, and the women stern and polite, . . . standing as if they were waiting for the first note of the piano to begin the hymn” とあるように、少女の想像において両性具有者を見る人びとの様子は教会に集う人びとの様子と重ね合わせられ、厳肅さが強調される (CS 246)。そこでは両性具有者の存在は「謎」のまま保持され、聴衆によって聖なるものとして受け入れられている。両性具有者が聖なるものであることは、少女の想像のなかで繰り広げられる連祷のようなやりとりに示される。そのやりとりには、少女がその日に耳にした “a temple of the Holy Ghost” という言葉が繰り返されている。

She could hear the freak saying, “God made me thisaway and I don’t dispute hit,” and the people saying, “Amen. Amen.”

“God done this to me and I praise Him.”

“Amen. Amen.”

“He could strike you thisaway.”

“Amen. Amen.”

“But he has not.”

“Amen.”

“Raise yourself up. A temple of the Holy Ghost. You! You are God’s temple, don’t you know? Don’t you know? God’s Spirit has a dwelling in you, don’t you know?”

“Amen. Amen.”

“If anybody desecrates the temple of God, God will bring him to ruin and if you laugh, He may strike you thisaway. A temple of God is a holy thing. Amen. Amen.”

“I am a temple of the Holy Ghost.”

“Amen.”

The people began to slap their hands without making a loud noise and with a regular beat between the Amens, more and more softly, as if they knew there was a child near, half asleep. (CS 246)

少女が想像する連禱においては、両性具有者をつくりだしたのは神の意志であること、そして両性具有者自身も、またテントに集う人びともみな「聖霊のやどる神殿」であることが共有され、両性具有者の存在が示す神秘とともに、すべてが静かな拍手によって了解される。この連禱において「神殿」の持つ意味は、先に述べた「コリント人への第一の手紙」における、信徒の各々のからだ（第3章）を指していると同時に、キリストを土台とした信徒の集まる“body”としての教会（第6章）を指しているだろう¹⁷⁾。そして少女の想像におけるコミュニティは、性差とは別の次元で「神殿」というアイデンティティが共有されうる場である。「眠りかけている子ども」を起こさないようにそっと拍手をするそのコミュニティでは、子どもがそのままにいることをも是認され得るのである。

作品の終盤に描かれる場面では、個人としての「神殿」、信徒の集まりとしての「神殿」、さらにカトリック教会という「神殿」が重ね合わせられる¹⁸⁾。またいとこたちを送って母親とともに修道院に行った少女は、そこでシスターに聖体降福式に出席するように促される。礼拝堂のなかで少女は、自分が“in the presence of God”なのだ実感し祈り始める（CS 247）。

17) Michaels, 107.

18) キリストと両性具有者の関係について、マイケルズは「ガラテヤ信徒への手紙」の第3章28節 “There is neither Jew nor Greek; there is neither bond nor free; there is neither male nor female. For you are all one in Christ Jesus” (Galatians 3:28)における両者の類似性を指摘している。Michaels, 108.

The child knelt down between her mother and the nun and they were well into the “*Tantum Ergo*” before her ugly thoughts stopped and she began to realize that she was in the presence of God. Hep me not to be so mean, she began mechanically. Hep me not to give her so much sass. Hep me not to talk like I do. Her mind began to get quiet and then empty but when the priest raised the monstrance with the Host shining ivory-colored in the center of it, she was thinking of the tent at the fair that had the freak in it. The freak was saying, “I don’t dispute hit. This is the way He wanted me to be.” (CS 247-48) (下線は筆者による)

少女が「機械的に」始めた祈りは、ここでもやはり「空っぽ」なまま終わろうとする。しかし教会においては、そこで司祭が「キリストの体」である聖体を示すのである。キリストそのものである聖体によって聖霊のやどる「神殿」である教会が満たされるように、ひとりの「神殿」である少女の抱える“emptiness”もその瞬間に満たされる。そしてそのとき少女が想像する両性具有者のテントから聞こえてくる言葉は、少女の存在をそのまま是認するものとして少女に一瞬の安らぎを与えるだろう。しかし礼拝堂を出た少女を待ち受けるのは、変わらない日常である。それはおどけたように少女を抱き寄せ、ベルトにくくりつけた十字架を頬に押しつけるシスターであり、運転手の耳が“like a pig’s”のように見えてしまう自分の辛辣な観察眼であり、牧師たちが祭りを視察して営業停止に追い込むという抑圧的な社会である (CS 248)。しかし自らが「神殿」であるという認識と、そのままの自分が受け入れられる場として教会は、少女にとってかけがえのない避難所であるだろう。

* 本稿は、日本フラナリー・オコナー協会第4回大会(2017年3月25日於明治学院大学)での口頭発表原稿に、加筆修正を施したものである。

* 本稿は、2015年度特定課題研究「アメリカ南部文学研究——フラナリー・オコナーを中心に」の成果の一部である。